ば、なほ封誤たず、開き見ればただし銭四貫のみ無し。爰に六宗の学頭の僧等集会り怪びて、女人を問ひて曰はく「汝何行をかする」といふ。答へて曰はく「する所無し。ただし貧窮に依りて、命を存つに便無く、帰 無く、怙無し。故に我れ是の寺の釈迦丈六仏に花と香と燈とを献りて福の分を願ふのみ」といふ。衆の僧聞きて商量りて言はく「是れ仏の賜へる銭なり。故に我れ蔵めず」といふ。返りて女人に賜ふ。女銭四貫を得て増上縁とし、大に富みて財饒にして身を保ち命を存つ。諒に知る、釈迦丈六の不思議の力と女人の至信とを。奇しき表の事なり。

行基大徳天眼を放ち女人の頭に猪の油を塗れるを視て呵嘖む縁　第二十九

故京の元興寺の村に、法会を厳備け、行基大徳を請へ奉りて七日法を説かしむ。是に道俗みな集りて法を聞く。聴く衆の中に、一の女人有り。髪に猪の油を塗り、中に居て法を聞く。大徳見て嘖みて言はく「我れはなはだ臭きかな。彼の頭に血を蒙れり。女を遠く引き棄てよ」とのたまふ。女大に恥ぢて出で罷る。凡夫の肉眼には是れ油の色なり。聖人の明眼には見に宍の血を視る。日本国にして是れ化身の聖なり。身を隠せる聖なり。

行基大徳子を携ける女人を過去の怨と視て淵に投てしめ異しき表を示す縁　第三十

行基大徳、難波の江を堀開かしめて船津を造り、法を説き人を化へたまふ。道俗貴賤集会りて法を聞く。爾の時に河内国若江郡川派里に、一の女人有り。子を携きて参り往き、法会にして法を聞く。其の子哭き譴めて法を聞かしめず。其の児年十余歳に至りて其の脚歩まず。哭き譴めて乳を飲み、物を噉ふこと間無し。大徳告げて曰はく「咄、彼の嬢人、其の汝が子を持ち出でて淵に捨てよ」とのたまふ。衆人聞きて、当頭きて曰はく「慈 有る聖人、何の因縁を以ちてか是の告有る」といふ。嬢子を慈ぶるに依りて、棄てずしてなほ抱き、持ちて法を説きたまふを聞く。明日にまた来る。子を携きて法を聞く。子なほ囂しく哭き、聴く衆囂に障へられて法を聞くこと得ず。大徳嘖めて言はく「其の子を淵に投てよ」とのたまふ。爾の母怪ぶれども思ひ忍ぶること得

器である可能性もある。二九 未詳。三国仏法伝通縁起・上には、大安寺真言院の傍にて涅槃宗を弘め、「常修多羅宗」と号した、とある(攷証)。「常修多羅衆」は、弘福寺にも存した(田村圓澄)。三〇 大安寺の常修多羅宗。三一「閾 爾雅注云、閾〈音域〉、門限也、兼名苑云、閾一名閫〈苦本反、之岐美、俗云度之岐美〉」(和名抄)。門の内外を区分する横木。「しきみ」が「しきゐ」の語源(箋注倭名類聚抄)。銭の置かれる場所が「門椅所」、「庭中」、「閫前」と、しだいに女人に近づいてきている。三二 訶梨跋摩の成実論・鳩摩羅什訳を所依として研究する学衆が「成実衆」「成実宗」と呼ばれた。元興寺、東大寺にも存した(田村圓澄)。大安寺伽藍縁起幷流記資財帳には費用が計上されていない。「別三論衆銭三百十八貫五百六十四文」をこれに擬するのは松浦貞俊の説。最初に大修多羅供銭、次に常修多羅供銭、最後に成実論宗分銭、と展開するが、その意味するところは不明。三三 大安寺の成実論宗。

一 諸経論を研究する学衆が「宗」として各寺に存した。大安寺にも、倶舎宗、三論宗、成実宗、法相宗、華厳宗、律宗、の六宗が存したのであろう。ただし、大安寺伽藍縁起幷流記資財帳には、三論衆、律衆、摂論衆、別三論衆、修多羅衆がみえ、本書によって、修多羅宗、大修多羅宗、常修多羅宗、成実論宗の存在を知ることができる。二 宗(研究者集団)の長。たとえば東大寺では大学頭、小学頭、などという役があった。三 寺に納めずに逆に。四 ある結果をもたらすたすけとなる縁。銭四貫を原資として富を増大させた。このようなばあいに「増上縁」の語を用いるのは、仏典語の転用といえよう。

第二十九縁　三宝絵・法三に引用。今昔物語集・十七ノ三十六に書承。五 天眼通。ものの現在のかたちを見る能力。表面化されていないものをも見とおす力。仏菩薩のもつ力のひとつ。行基を菩薩としてとらえている。「放」と表現されるのはめずらしい。六 行基の登場する説話で、女人が重要な役割をはたしているものは、本説話以外に中巻二縁、八縁、十二縁、三十縁。七 彘膏。髪に塗る油脂のひとつ。沢(あぶら)(わた)を用いて髪に塗ったのであろう。延喜式・典薬寮にみえる猪膏もこれか。八 奈良県高市郡明日香村大字飛鳥あたり。元興寺は本元興寺。→上巻十一縁。九 血を被っている。行基の眼に映じた女人の姿。猪油を髪に塗っていることをいう。一〇 →上巻四縁。一一 大方広仏華厳経・離世間品に、菩薩の有する十種眼のひとつとして明眼がみえる。一二 身を化してあらわれた仏菩薩。一三 →上巻四縁。

第三十縁　あやしき表(しるし)の説話。今昔物語集・十七ノ三十七に書承。一四 行基の登場する説話で、女人が重要な役割をはたしているものは、本説話以外に中巻二縁、八縁、十二縁、二十九縁。一五 過去世における怨敵。行基にはこのようなことを知る(原文「視」)能力があった、と考えられているのである。この力は宿命通(しゆくみようつう)とよばれ、仏菩薩のもつ力のひとつとされた。行基を菩薩としてとらえている。一六 →中巻七縁。一七 東大阪市。この女人は船で川を下って難波の船津の地へ向ったか(和田萃)。一八「こ」の表記を「子」「児」と変化させている。本説話では多くのばあい「子」であり、二箇所のみが「児」。